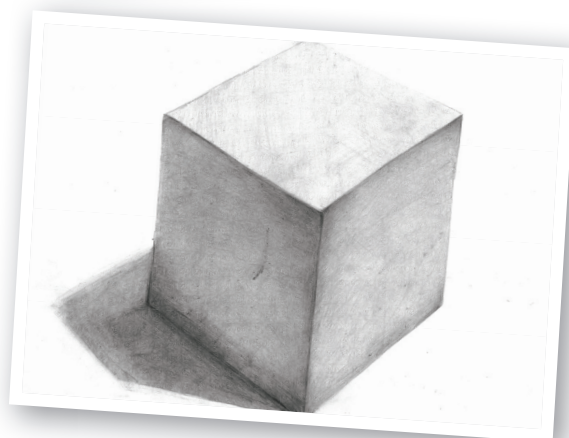
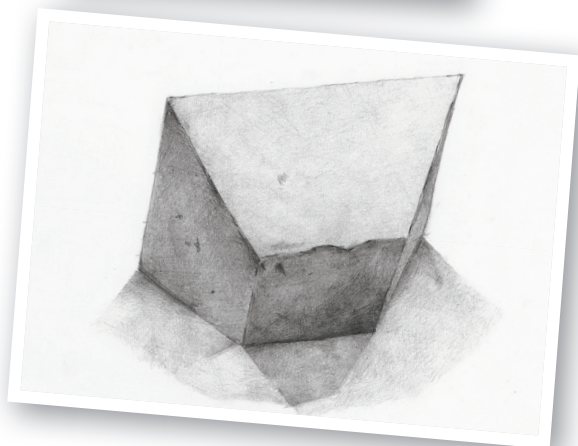
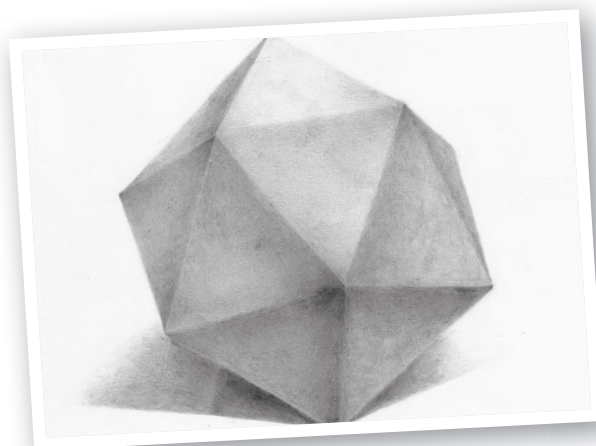
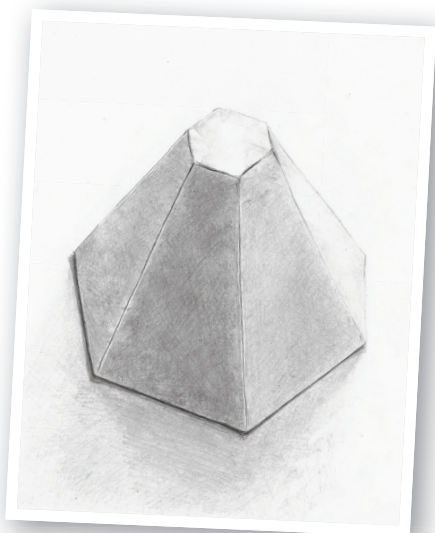


図書館だより

Library News No.82

National Institute of Technology (KOSEN) , Nara College

2025年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙画像は、1C 橋浦 希佳 さん(左上)、1E 畑中 穂希佳さん(右上)
1E 今西 雪乃 さん(左下)、1C 森 さくら さん(右下) の作品

表紙絵は美術の授業の作品で教員から推薦された中から教育支援センター運営委員会での投票により選出しています。また、図書館だより掲載ページでは候補作も含めすべての作品がご覧になれます。 <https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/publication/librarynews/>



目 次

巻頭言	2
読書感想文コンクール・個人多読・クラス多読表彰について	4
読書感想文コンクールを終えて	5
読書感想文コンクール入賞作品	7
あなたにとって図書館とは	11
新刊のご案内.....	11
おすすめ図書紹介	12



巻 頭 言

教育支援センター長 谷口 幸典

本年度、教育支援センター長を拝命した。巻頭言なるものを初めて執筆させていただくにあたり、業務を管轄する立場として、本校における図書館の立ち位置をごく簡単に紹介することから始めたい。昭和39年（1964年）の本校の開校と同時に、まずは校舎内に図書室が設けられ、その後、昭和50年（1975年）に現在の図書館が設置されて、今年で設置50周年となる。その支援内容として、①読書感想文コンクール開催、②学生図書委員会主導による読書週間活動、③個人およびクラスを対象とした図書多読表彰、④学生図書委員と教員によるブックハンティングの年2回開催、⑤図書館だよりの発行、⑥研究紀要の発行、などがある。また、蔵書数は令和6年度（2024年）開始時点で86,767冊であり、国立の学術研究機関として、学内だけでなく学外へも門戸を開いて近隣の方々にも利用いただいております。地域の「知の拠点」としての役割を果たしている。学生の要望に対しても、TOEIC・技術士試験問題など対策本、特許・知的所有権関係資料、および、留学の参考のための海外情報誌などのコーナーを設け、学習支援として便宜を図る努力を続けてきた。さて、図書館と筆者は同い年である。ところが見た目については図書館のほうがいくぶん若々しいのである。それもそのはず、令和2年（2020年）2月28日、大規模な改修工事を経て、見た目の若干の若返りはもちろん、中身において変身が成された。学生の自学自習を促す図書コーナーの機能向上の他、「ラーニングコモンズ」および「FABスペース」が新規に併設されることで、コミュニケーション能力、協調性、社会性等のコンピテンス育成に係る新たな教育支援が可能な設備となった。併せて改装された2階大視聴覚室と共に、持続的発展性を持つ教育支援施設に変身し、竣工式にてその姿を華々しく披露する予定であったが、それが叶うことはなかった。工事完了後すぐにCOVID-19の国内感染事例増加によって学生は登校禁止となり、4月に国内緊急事態宣言が発令され、長きに渡る外出禁止・自粛期間に入ったためである。私は図書館改修案策定のワーキングメンバーであったため、あの当時、あのような形で学生に対するお披露目の機会が失われてしまったことは非常に残念であった。図らずも今年はセンター長を拝命したことで、当時のやるせなさが思い起こされることになった。

COVID-19による外出禁止・自粛期間においては、他者との物理的な交わりが突然制限され、多数の人々が「孤独」な状態になり、それに起因する精神的な困難を経験することになった。特に、親元を離れて生活していた大学生は、講義、ゼミ、部活・サークル活動、そしてアルバイトと、モラトリウム期間の活動全てが奪われただけでなく、遠隔授業等に対応するために自宅に引きこもるしかない状況に陥ったわけで、必然的に「おひとり時間」の割合が高くなり、「孤独」の影響が大きくなった。もちろん、インターネットコミュニケーションツールを積極的に駆使して他者とのつながりを維持した人もいれば、元来孤独を好む性格であって「おひとり時間」を問題なく過ごし、有効活用できた人もいたのであろう。いずれにせよ、他者との交流の制限がもたらす様々な問題において、人々は「孤独」に対してかくも弱い存在であること

が露になった。その抵抗の結果、個人個人が情報通信機器を駆使する時代となり、自ら情報を得る行動を当たり前とする社会となった。片手で操作して情報が得られるだけでなく、いつでもどこでも自らの情報を好き勝手に発信することも容易となり、スマホさえあれば推しメンと疑似的交流ができる。親兄弟が傍らにいる一家団らんの時間も各々スマホを手にとることがあるのかもしれない。常に交流可能である家族や友人などと触れあうことも専らスマホ上で行われるようになるかもしれない。もはや、スマホが無ければ様々な危機に直面し、相まって「孤独感」に苛まれてしまうのではないかと。いや、いつの時代も皆、そのような「孤独感」を抱いて成長してきたのではないと思う。さすれば若い高専生の皆さんは今まさに、様々な「孤独感」を抱えて学校生活を送っている。図書館2階の図書コーナーは、静粛を保って思い思いに図書を探し、読書や執筆に耽ることができる環境（つまり一般的な図書館の機能）を創出している。私にとって読書とは、書籍という文字の集合体で表された形式知や物語との邂逅で、それを欲したり、執筆活動に昇華することは内省（リフレクション）行為そのものである。スマホから離れ、各々の「孤独感」に促されるがまま、必要な知識はもちろん、新たな自分の構築（変身）につながる邂逅を欲する行為として、図書コーナーでの「おひとり時間」を堪能してみてはいかがだろうか。その一方で、階段を下りれば、他者と交わることで幾分騒がしくなることを前提とした「ラーニングコモンズ」環境となる。高専機構事業によって、「FABスペース」は起業家工房の一部としての運用も開始している。他者と交わる時間、やたら自己効力感を発揮してくる輩もいて、今の自分にとっては好ましくない者とも過ごす羽目になりがちであるものの、この時間を通じてのみ体験できる新たな価値観の発見と比較、それでもたらされる心の中の葛藤は、しばしば行き詰まりがちな図書コーナーでの内省行為（特にレポート執筆）に、新しく、豊かで幅広い視点となって還元され、「おひとり時間」の充実をもたらししてくれるはずである。図書館で、孤独感を抱えての「おひとり時間」と、自己効力感を発揮する場としての「他者との交流」を自由に行き来することを通じて、新たな自分の発見を繰り返してみてはいかがだろうか。

時代はあっという間に過ぎ去ってしまう。いつの時代であっても、若者であるからこそ否が応にも「孤独感」に苛まれ、もがいているからこそ人知れずの脱皮が行われる。設置50周年を迎える本校図書館を管轄する立場として、私もまだまだ変身できるのではないかと、蛇足ながらに思う新年である。



読書感想文コンクール 個人多読・クラス多読表彰について

〔読書感想文コンクール表彰〕

第48回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生からは197編、2年生からは191編、3年生からは14編、4年生からは1編、合計403編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員7名と国語科教員3名による審査・投票の結果、その中から4名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、栄誉をたたえたいと思います。また、惜しくも入選には至りませんでしたが、審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞（1名）

1 C 橋浦 希佳さん 「羅生門」で語られる利己心と人間社会 「羅生門」 芥川 龍之介 著

優秀賞（3名）

1 E 畑中 穂希佳さん 今、大切にすべきこと。 「はてしない物語」 ミヒヤエル・エンデ 著

2 S 岩崎 史芳さん 人の別れ—色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年—

「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」 村上 春樹 著

2 I 三原 瑚桜さん 星の温度 「よだかの星」 宮沢 賢治 著

佳作（36名（次の33名及び氏名非公表希望3名））

1 M 櫻井 陽日さん	1 M 辻井 春道さん	1 E 岩田 のどかさん
1 E 川辺 匠人さん	1 E 中村 航 さん	1 S 永井 大翔さん
1 S 森 隆裕さん	1 I 牧野 みおさん	1 I 松本 誠人さん
1 I 村井 友 さん	1 I 渡邊 心陽さん	1 C 角 彩世さん
1 C 戸井詰 桃佳さん	2 M 影山 和郷さん	2 M 川嶋 夕陽さん
2 M 小路 篤寛さん	2 M 角田 駿之介さん	2 M 仲村 太希さん
2 E 菊山 花音さん	2 E 野口 一柁さん	2 E 平林 大暉さん
2 E 松村 奏佑さん	2 S 大江 翔太さん	2 I 金子 拓夢さん
2 I 谷川 貴一さん	2 C 中川 和奏さん	2 C 三上 梓 さん
2 C 渡邊 周平さん	3 M 岡橋 空輝さん	3 E 岡山 拓未さん
3 I 辻中 日菜さん	3 C 鎌倉 凌輔さん	4 M 石田 眞子さん

読書感想文コンクール表彰式

表彰式は1月8日（水）昼休みに校長室にて行われました。その模様は、図書館からのお知らせに掲載の読書感想文コンクール表彰式ページをご覧ください。



図書館からのお知らせ



（図書館からのお知らせ<https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/information/>）



〔個人多読表彰〕

個個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

第1位	情報工学科	5年	吉田	彩人さん
第2位	電気工学科	3年	木村	要一さん
第3位	システム創成工学専攻機械制御システムコース1年		阪本	靖大さん
第3位	物質化学工学科	5年	加納	凜太郎さん
第5位	物質化学工学科	5年	中南	琢磨さん
第6位	機械工学科	2年	川嶋	夕陽さん
第7位	情報工学科	1年	高島	誠一朗さん
第8位	情報工学科	5年	前島	由さん
第9位	システム創成工学専攻機械制御システムコース2年		松本	尚樹さん
第10位	物質化学工学科	3年	田口	和哉さん



[クラス多読表彰]

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。



第1位	システム創成工学専攻機械制御システムコース1年	(24.5冊／人)
第2位	物質創成工学専攻1年	(11.5冊／人)
第3位	物質化学工学科4年	(9.2冊／人)
第4位	電気工学科4年	(7.6冊／人)
第5位	物質化学工学科3年	(7.2冊／人)
第6位	物質化学工学科5年	(6.8冊／人)
参考：	システム創成工学専攻電気電子システムコース1年	(8.3冊／人) ※
(※) 専攻科のクラスが上位5位までに3クラス以上入っていた場合、専攻科は上位2クラスに制限し、本科から上位4クラス、合計6クラスとする		

全クラスの貸出冊数は「奈良高専図書館 多読表彰ページ」をご参照ください。
<https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/event/tadoku/>



多読表彰ページ

令和6年度

読書感想文コンクールを終えて

《最優秀賞について》

1Cの橋浦さんは、芥川龍之介の「羅生門」を取りあげてくれました。高校国語の教科書でも定番教材として採用され続けている、芥川の代表作です。作品では、下人と老婆の取った利己的な行動の残酷さに目を向けながら、それを道徳的な立場からの批判に終始することなく、自身も下人や老婆のようにありうることを省み、さらには人間社会の現実の姿を物語から照射してくれました。橋浦さんの読書は、「人間の生き方の暗い部分に目を向けさせられ、過去に対する自信がなくなり、これから先の人生が少し不安になった」一方で、「現実と自分の生き方に冷静な視点を持てるようになった」と述べてくれているように、自分の価値観に揺さぶりがかけられ、そこから自分なりの思考を立ち上げていく、得難い経験であったことと思います。

《優秀賞について》

1Eの畑中さんが読んでくれた本は、ファンタジー作品として現代でも読み継がれている、エンデの「はてし

ない物語」です。感想文は、「慣れ」によって見落としがち大切なことを、物語の少年バスチアンに寄り添い、冒険を共に経験することで、改めて気付く契機としてくれたものでした。畑中さんの言う大切なものとは、自由な想像力、「本当」の友達、ありのままの自分の三つです。「日々の生活を豊かにすること」であるこれらを見失わせてしまう社会を見つめ、豊かに生きるために必要なものを保ち続けようとする姿勢を、畑中さんの感想文は示してくれています。畑中さんにとって、この度の読書経験は、自分の生き方の再発見を促してくれたものだったろうと思います。作文として、文章の表現は簡潔であり、構成もよく整理されたもので、優秀作にふさわしい感想文でした。

2Sの岩崎さんが取りあげてくれた本は、世界的にも広く読まれている作家村上春樹の「色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年」です。物語世界の中で描かれる「別れ」を手掛かりに、岩崎さんなりに「別れ」を再考してくれたものでした。別れることには恐れが伴う。しかし、作品が描く別れには、美しく綺麗などころがあります。岩崎さんは、そこから、別れによる束縛からの解放、自由の獲得を読み取ってくれました。別れが持つネガティブな側面を引き受けつつ、新しい世界へ踏み出すための一歩というポジティブな意味合いを見出し、これからの別れに備えようと心に決めてくれています。新たな視点の獲得という意味で、この作品との出会いは意義深いものとなったことと思います。作文としては、この先を読みたいと思わせる書き出しと話の運び方、そして考えを言い表すための言葉遣いに工夫を凝らしてくれた作品でした。

2Iの三原さんは、詩人であり童話作家でもある宮沢賢治の著作から、「よだかの星」を選んでくれました。作品では、物語の結末についての解釈を述べながら、自ら選び取ったこれからの生き方を、ありのままの言葉で表明してくれています。よだかとは違って、誰かと関わらざるをえないこの世間で生きることを、等身大の姿で受け止めながら、よだかにならって、力を尽くすことを宣言してくれた言葉は、書き手の力強さを感じさせてくれるものでした。また、三原さんはこの物語をたびたび再読してくれるほどであるといい、この度の感想文は、その営みの賜物であるように思いました。優しいよだかの、星の世界に救いを得た姿に思い至った時、「妙に晴れ晴れした気持ちになった」という感覚は、物語の再読を経てたどり着いた大切な気づきであり、読書人には共感できるところがあるものです。三原さんには、これからもこの物語を読み返してもらいながら、その都度の新たな発見を得てもらいたいと思います。

《全体について》

今回の読書感想文コンクールでも、多彩な作品が数多く寄せられました。応募作に目を通しながら、まず思ったことは、学生の皆さんの選書の多様さです。夏目漱石や芥川龍之介、志賀直哉、太宰治などといった有名どころはやはり健在。現代の作家でも、梨木香歩や宮部みゆき、東野圭吾、辻村深月あたりは根強い人気でした。映画やドラマ、漫画、SNSなどをきっかけに、その原作の本を選んでくれた学生も複数いました。また、例年通り科学関連の選書も散見され、その外、エッセイ集や、伝記、体験記、自己啓発書など、さまざまジャンルに亘りました。

それぞれが興味を惹かれた本を読み、その読書体験から得られた思い・考えを、感想文としてまとめてくれました。文章を書くのが得意な人は（きっと）楽しみながら、苦手な人は（おそらく）苦心しながら、原稿用紙と向き合ってくれたのではないかと思います。

さて、感想文を書く時に、友人と感想を話し合う時とは違う難しさを感じていた人はいないでしょうか。書きたいことがあるはずなのに表現が見つからない、表現してみたもののうまく言い表せていないような気がする、もっと書きたいことがあるのにまとまらない、など。これは、言葉を扱うことに注意を向けてくれたからこそ感じる難しさです。決して悪いものではありません。この関心を持ちながら書くことで、皆さん自身の言葉を育むきっかけになります。

次回の読書感想文コンクールに応募する学生には、この難しさと辛抱強く付き合いながら、語彙や表現をどう使うか、どう工夫するかと思いめぐらせつつ筆を執って、いい作品を仕上げていてもらいたいと思います。力作をお待ちしています。

（国語・藤井）



読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞

「羅生門」 芥川 龍之介 著

「羅生門」で語られる利己心と人間社会

物質化学工学科1年 橋浦 希佳

中学生の時、芥川龍之介が自殺という形で生涯を終えていることを知り、衝撃を受けた記憶がある。それ以来、彼の思考がどのようなものか興味があり、まずは代表作から読んでみることにした。

読了後、この物語の急展開に感情と思考が取り残されたような感覚を覚えた。舞台の羅生門は災いが立て続く京都にあり、死体の捨て場と化している。そこにある下人が佇む。解雇されてしまい、生きるために盗人になるしかなかったが、なかなか決断できずにいた。その時彼は、ひたすらに死んだ女の髪を抜く老婆を見つける。下人が許されざる悪事に激怒し老婆を押さえつけると、老婆は、かつらを作って売るつもりだったと弁明した。その女はこのような仕打ちをされても当然な、詐欺をしていた人間であり、自身のその生涯から、生きるための多少の悪事は仕方がないことにも理解があるだろう、と老婆は説明した。この話を冷然に聞いていた下人に、ふつふつと盗人になる勇気が沸き上がる。餓死という選択肢は彼の頭から消え去る。老婆の論理では自身も許されるはずだと、ためらいなく老婆の着物を剥いで蹴り倒し、下人は逃亡した。

人間の暗い部分が浮き彫りになっている話だった。老婆も下人も利己的な行動を選択し、更に、その選択は間違っていないと自分に言い訳をしている。とても醜いことだと思ったが人間社会では当たり前のことでもあると感じた。私もいざ生死を迫られた状態では、どんな悪事をしてでも生き長らえたいと思うに違いない。罪悪感があっても、仕方がないと割り切り正当化するはずだ。私達は、利己的思考ではなく利他的思考を持つように育てられてきたはずである。道徳的観点から見れば、例え餓死しようとも悪には手を染めない、つまり、自分の欲望よりも周りの人を大切にする選択をするべきである。しかし、その理想像はこの社会には存在しない。道徳心に溢れた理想像を掲げる人間に潜む、利己心の醜さを感じさせられる。この本を読んだ後、生活の中で自分がいかに利己的思考をしているか、些細なところで気づいてしまう。人には自分を美化する癖があるために、無意識の正当化に自覚がないのかもしれない。人間が、道徳心のある程度持っているつもりで実は利己心で行動しているとすると、この社会が虚しく思えた。

ただ、この本が「利己心ではなく道徳心を持とう」と伝えているかという点と全く違うと思う。利己心は、完全な悪ではない。利己心によって個人が守られているからだ。これによって、老婆も下人も自分の命を大事にできたという見方もできる。この本は、ただただ、道徳心を理想としつつ利己心を捨てきれない人間社会の現実を突きつけたかったのではないかと思う。その社会が悪いもので、改善する必要があると伝えたいのではない。盲目になりがちな私達に、実際は違うのだと教えようとしているように感じた。

「羅生門」を読んだ後、自分を含めて人間の生き方の暗い部分に目を向けさせられ、過去に対する自信がなくなり、これから先の人生が少し不安になった。後味の悪さが長引く話だった。この本は勇気を持てたり、人との繋がりの大切さを感じられたりする本とは違い、現実と自分の生き方に冷静な視点を持てるようになる大切な一冊となった。読者によって、印象も考えることも大きく異なると思うので、この本を読んだことのある人と感想を語り合ってみたい。

優秀賞

「はてしない物語」 ミヒャエル・エンデ 著

今、大切にすべきこと。

電気工学科1年 畑中 穂希佳

現代社会において、私達は大切にすべきことを忘れつつある。普段の生活の中では、「慣れ」により気付くことが難しい。私自身、意識をしたことがほとんどなかった。

私が本当に大切にすべきことを理解するきっかけとなったのが、「はてしない物語」だ。この物語では、主人公のバスチアンが本の世界に入り込み、様々な冒険を通して成長する。バスチアンの冒険から学ぶことは多く、感心した。その中で、これから大切にしていこうと感じたことが三つあった。

まず一つ目は、自由に想像することだ。子供の頃と違い、大人になるにつれ自由な想像力を手放す人が多くいる。想像力は、物事を様々な視点で考え、アイデアを生み出すことに役立つ。バスチアンは自身の想像力で、本の世界ファンタジエンを救ったが、現実であっても想像力が何かを救うことが多々ある。私は、バスチアンが冒険していく様子を想像してみると、より物語に引き込まれ、頭が柔らかくなった気がした。

二つ目は、「本当」の友達を持つことだ。バスチアンの友人アトレュは、拒絶されようとも、バスチアンのことを常に考え行動を起こした。今の世の中には、上辺だけの付き合いである友達や、本音を言い合えない友達というものが存在する。しかし、そのような関係は「本当」の友達と言えるだろうか。それに比べ、バスチアンとアトレュの友情は本物だと感じた。互いに信頼し合い、時には間違った行動を咎め正しい道へと導く関係こそが「本当」の友達と言えるのだと思う。相手のなすこと全てを肯定することは、友達としてするべきではない行動だろう。

最後に、最も大切にすべきだと感じたことは、ありのままの自分であることだ。バスチアンは世界を救った後、何でも望みが叶う道具を使い、多くの望みを叶えていく。不器用で臆病な太った少年であったバスチアンが、勇気のある強く美しい少年へと変わるのだ。しかし、バスチアンの心が満たされることはなく、最後はありのままの自分に戻ったことを喜ぶことになる。周囲の目を気にし、自分にコンプレックスを抱える人が世の中に少なからずいるが、そのようなコンプレックスも含め自分という唯一無二の存在をつくっているのだと認められたらどれ程良いだろう。悲観するのではなく、受け入れ、ありのままの姿で人生を楽しむことは、自分を解放し成長させることにつながる。私は、バスチアンの体験からそのようなことを理解した。

少年バスチアンの冒険からなる物語は、私に大切にすべきことを気付かせてくれた。『自由に想像すること』、『「本当」の友達を持つこと』、『ありのままの自分であること』。どれも、日々の生活を豊かにすることばかりだ。最近は様々なものが発達してきている。それにより、与えられた情報をそのまま受けとめ想像力を働かせなかったり、本心を知らぬまま画面上でだけつながった信頼し合っていない友達を作ったりする人も多い。また、他人と自分を比べ、自分の嫌な所ばかり目をつける人もいる。大切なことをないがしろにしているのだ。そのような今だからこそ、私は物語から学んだことをしっかりと頭に入れ、生きていきたいと思う。まずは、ありのままの自分であることから頑張ろう。

「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」 村上 春樹 著

人の別れ ―色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年―

電子制御工学科 2 年 岩崎 史芳

君とはもう二度と会いたくない。突然友達に告げられた時、人はどうなるのだろう。人々は「別れ」というものをひどく恐れる。なぜ「別れ」を恐れるのか。理由は人によって様々だろうし恐怖を感じる程度も異なるのだろう。ただ、私に関してはこの問いに明確な答えはなかった。漠然とした不安がある、ただそれだけと何も感じず受け入れてきた。己がいる人間関係を当たり前だと思いつつも、それが崩壊することをおそれ日々を過ごしてきた。

主人公多崎つくるとは高校時代を、仲の良いシロ、クロ、アカ、アオとそれぞれ姓に色のつく四人との五人グループで過ごしてきた。時が経ち一人だけ故郷から離れた主人公は突然その四人から理由も告げずに絶縁される。この「別れ」のショックでつくるとは死の淵を一時さ迷う。そこから立ち直った頃にはもう以前のつくるとは全くの別人のようになった。そんな出来事から物語は進む。

私は前述した主人公の「別れ」にどこか言葉に表せない美しさがあるように感じる。小説では主人公は様々な別れを経験する。どれもが残酷で哀しい。なのになぜか四人との別れだけは綺麗だと思えた。

主人公の五人グループは高校時代を共に過ごしたが、それは友情という名の一種の束縛のように見えた。五人という共同体が存在することに価値があり、それを崩壊させないための暗黙の了解がそこにはあった。その共同体は見事に調和し、一切の隙間もなかった。あまりにも完璧すぎたのだ。いつ亀裂が生じてもおかしくはなかった。実際少しの綻びでこの五人は壊れてしまった。

つくるとの追放以降、残った四人は次第にばらばらになっていった。時代の流れに吞まれて摩耗し、最後には消え去っていた。あの美しく完璧な共同体が、存在していたという記憶と事実だけを残して。

それから時が経ち、グループの一人のシロが何者かに絞殺され死別する。五人グループが解体して以降、それぞれはつくるとシロとの別れを経て己の道を進んでいった。

この別れにはそれぞれにとって異なる意味があった。しかし、いずれの場合においても、「別れ」はある意味での解放であったように感じる。共同体という束縛からの解放、形は異なるものの各々は自由というものを手に入れていたように思えた。それが私の目には非常に美しく映った。

共同体とはそこに属する人の、自身が存在していることの一種の証明であると本書を読んで感じた。その理論で言えば、人間にとって「別れ」というのは自分の存在が消失していくことを意味する。「別れ」を恐れるのはそれが原因だろう。自分の存在が少しずつ消えてしまうように感じるから。これが私の答えだ。

本書を読んで感じたことが他にもある。人々が「別れ」を恐れるのは当然のことだ。しかし、別れを恐れ、心身を疲弊させてまで日々を過ごす必要は無いのではないか。確かに「別れ」は時に残酷で哀しいものだ。昔存在した相手との関係が目の前で消失していくのは見ていて辛いものである。でもそれは一種の解放、そして新たな世界へ進む一歩とも言える。そう捉えて、「別れ」に酷く怯えず受け入れていくべきだ。

これからの私のおそらく長い人生の中で、何度も「別れ」を経験するだろう。その時はそれをまっすぐに受けとめ、歩みを止めず、振り返ったときに自分でも美しいと感じられるような「別れ」にしてみせよう。

「よだかの星」 宮沢 賢治 著

星の温度

情報工学科 2 年 三原 瑚桜

一年前、友達が好きだと言うので宮沢賢治の本を読んだ。どの話も面白く、宝石を散りばめたような文章に圧倒された。すすきから滴る露。黄金色の溶岩。銀河の水の燐光。賢治の世界にはさまざまな光が登場する。鉱物の例えが多いからだろうか。あたたかく包み込むようなものではなく、どこか冷たくて鋭い、私たちが突き放すような光を連想することが多かった。

「よだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。今でもまだ燃えています。」収録されていた話の中で一番美しいと思った『よだかの星』の、最後の場面だ。特に「今でもまだ燃えています。」の一文に鳥肌がたった。今でもまだ燃えている。よだかが急に現実に来た。読み終えた瞬間、何十光年先にいるよだかが私を見ている気がして驚いた。

私はこの一文で『よだかの星』を好きになって、以降たびたび読み返すようになった。いつ読んでもこの描写には感動させられる。しかし、それと同じくらい、これで本当に良かったのかという疑念も湧いてきた。天の星々に相手にされなかったよだかが、自力で星になるという願いを叶えたところはいいと思う。しかしよだかが鳥社会に馴染めずに一人で死んでしまったのも事実で、それに対する虚しさもある。よだかが星になる結末で本当に良かったのか。私がよだかと同じ立場だったら、今までいじめてきた鳥共や、いじめを許してきた社会に復讐しないと気が済まない。

私はあなたを嫌ったりしない、遠くへなんか行かないでと声をかけたくなくなったが、弟の川せみですら引き留められなかったのだから無理な話だろう。そして恐らく、よだかはいじめを苦にして死のうとしたのではない。よだかは自分が甲虫を食べることと、鷹が自分のために無駄な殺しをすることがたまらなく辛いと言った。この感情がよだかを死に追いやったのだ。当然のことながら、生物は何かを食べなければ生きていけない。それすら拒否できるほどの優しさを持ってしまったよだかにとって、現世に救いがあるとは思えない。この考えに思い至ったとき、私は妙に晴れ晴れした気持ちになった。誰も傷つけない星々の世界こそよだかには合っていたのである。

私はよだかほどの善性を持ち合わせていないが、共感できる場所はある。私は人と話すのが苦手だ。頑張ろうとすると空回りするし、私の存在そのものが場を悪くしていると感じて、消えてしまいたくなるのはしょっちゅうである。私もよだかのように、星々の仲間入りができたら良かったのだが、人間は誰かと関わらなければ生きていけず、孤独に徹する勇気を持たない私は結局世間との交わりを選ぶ。あの結末は、よだかにとってはハッピーエンド、私にとってはバッドエンドだ。生きづらい世界で生き抜く術を教えてくれなかった。よだかは私にとって、永遠に手の届かない星であり続ける。

ただ、よだかの美しさも、同様に永遠であり続ける気がする。それはよだかが最期まで力を振り絞ってそらを目指したからだ。ならば私も、自分の力を尽くしたと言えるまで頑張ってみよう。心の中で熱い星を燃やしてみたい、と言うのはカッコつけすぎだけど、しかしそうすれば、私のような者でも小さなひかりを出す、かもしれない。そのひかりが誰かを照らし、導くことがあったとすれば、もう何も言うことはない。

あなたにとって『図書館とは』

～あなたにとって図書館とはどのような場所ですか～ 物質化学工学科3年 今村 大河

読者諸君にとって「図書館」とはどのような場所か、考えてみて欲しい。

「一週間に一度訪れる程大好き」「訪れることをためらってしまう」いろいろな言葉が頭の中に浮かんだらう。筆者は「偶に立ち寄る落ち着ける空間」というイメージを持っている。図書委員会に所属している事抜きに、筆者はこの空間を非常に気に入っている。

筆者は本好きがきっかけで、図書委員会へ参加し、あれよあれよという間に所属してから約三年の年月が経過した。図書委員会としての業務の中で印象深いものはブックハンティングだろうか。大阪梅田にあるジュンク堂やオンラインショッピングにて、学科で出たリクエスト本を購入する年二回のイベントである。クラスメイト達の求める本を探す時間、見慣れない本との出会い、パリッとした新書の香り、業務の傍ら筆者の興味を惹く本に出会えた時プライベート用に本を購入することもまた良いスパイスになっている。もはや業務であることを忘れて、非常に楽しんでいる節もある。

筆がのってきたので、筆者の図書館利用について語らせてほしい。

思えば筆者が図書館を利用する目的は大きく分けて二つの理由だ。レポートを書く時や発表製作をする時のヒントを得るため、または、読書用の本を探すためである。

後者の目的で訪れた際には、非常に良い経験を得られる。筆者はタイトルを見てランダムに本を選んで借りている。この方法の時、筆者の趣味の本に出会えた時にはまた改めて行いたいと思える。筆者に合わない本を手にとってしまった時には新しい扉を開ける時もあるのでまた一興である。

前者の目的で訪れた際には、筆者の求めるデータを探して一時間以上こもる事が多い。

「私の発想は正しいのか？はたまた誤りなのか？」そのような葛藤と興味と共に本にかじりつく時間が週一の習慣になりつつある。そんな時間が最近は気に入ってきた。

ここまで筆者の本好き、図書館愛について控えめに長々語ってきたが、ここで改めて読者諸君に問いたい。あなた方にとって「図書館」とはどのような場所か。

「苦手意識が…」と思ってしまう読者諸君はこのような長文を書く変人を生む「図書館」と言う環境に何度か通って欲しいと筆者は願う。

この長文を読んで図書委員に興味を持った、図書館に行こうと思えた読者諸君は是非とも図書館に足繁く通っていただきたい。

最後にこの言葉で締めくくりたい。「読者諸君、来たれ図書館、来たれ図書委員会！」

新刊のご案内（その1）

令和7年1月以降に【新刊コーナー】へ排架した新刊図書をご案内します。

【第172回芥川賞受賞作品】

『D T O P I A（デートピア）』

安堂ホセ著

『ゲーテはすべてを言った』

鈴木結生著

【第172回直木賞受賞作品】

『藍を継ぐ海』

伊与原新著

【第172回芥川賞候補作品】

『ダンス』

竹中優子著

『二十四五』

乗代雄介著

【第172回直木賞候補作品】

『よむよむかたる』

朝倉かすみ著

『飽くなき地景』

荻堂顕著

『秘色の契り』

木下昌輝著

『虚の伽藍』

月村了衛著

「葉桜の季節に君を想うということ」 歌野晶午著 情報工学科2年 三原 瑚桜

本著は2004年のあらゆるミステリーの賞を総なめにした長編小説である。著者の歌野晶午は、事件のリアリティよりも謎解きのロジックを重視した、いわゆる新本格と呼ばれるジャンルでデビューした推理小説家だ。新本格作家は魅力的な事件を構築することや、最後の瞬間まで読者をだますことに心血を注ぐ。すべては読者を唸らせるため。1980年代に新本格ムーブメントが起こって以来数々の名作が世に放たれたが、中でも本著は新本格を代表する作品の一つとして挙げられることが多い。

この本のあらすじを紹介しよう。自称「何でもやってやろう屋」の元私立探偵・成瀬将虎は、同じフィットネスクラブに通う愛子から悪質な靈感商法の調査を依頼される。そんな折、自殺を図ろうとしていた麻宮さくらと運命の出会いを果たして、事件と恋の物語が動き出す。

将虎はあるときはガードマン、あるときはパソコン教室の講師、あるときは映画のエキストラになって、三つ四つの顔を使い分ける生活を送る。人の一生なんて短いだから、やれるときにやりたいことをやってしまおう。というモットーを掲げる、バイタリティにあふれた人だ。色々な業界に足を踏み入れてきた将虎は、以前にも事件に遭遇したことがあるらしい。本著のメインは靈感商法事件だが、ページを進めると、将虎が過去に関わった二つの事件が徐々に語られ始める。

それに加え、靈感商法に身を墜とした主婦の話や、さくらとの恋物語も同時進行的に描かれる。物語は残りページ数が心配になるほど、それぞれに発展してゆく。そして、一見つながりの無いこれらの事件がただひとつの真実に収束するラスト三章、読者は驚きと感動の渦にのみこまれる。私は本著を読み終えるといつも、葉桜の木漏れ日が脳裏に映る。

将虎がパソコン教室の生徒・安さんに頼まれて調査していたある人物の現在について、事実を伝えるか思い悩んだ結果、ありのままを話すことに決めたシーンがある。将虎は「美化した嘘をつくことは、安さんを愚弄することになるような気がした。」と語る。相手のためを思って秘密にすることは、優しさではなくその人をないがしろにしている気持ちの表れではないのか。この問いに対し、読者はどう答えるだろう。謎解きだけでなく、こういった将虎の人生哲学というものが随所に見られることも、本著の魅力だと思う。

新刊のご案内（その2）

【校長先生からの推薦図書】

『友だち幻想 人と人の“つながり”を考える』

菅野仁著

【学生支援センターからの推薦図書】

『大切な人を亡くしたあなたへ』

坂口幸弘著

『学校を変える いじめの科学』

和久田学著

『いじめ加害者にどう対応するか』

斎藤環ほか著

【各学科の先生からの推薦図書①】

『デジタルファブ리케이션とメディア』

三谷純ほか著

『Ansys Fluentによる計算解法』

伊東章ほか著

「アルジャーノンに花束を」

ダニエル・キイス著 小尾美佐訳 情報工学科1年 恒川 向日葵

もっと賢くなりたい！

そう思ったことがある人も多いのではないだろうか。

この物語は知的障害を抱えるチャーリー・ゴードンが書き記す“経過報告”として描かれている。チャーリーは賢くなりたいという思いが強く、向上心も十分にあった。ある日、そんな彼にある脳手術の話がやってくる。その手術が成功すれば知能が非常に高くなるとされており、実際にその手術を受けた白ネズミ、アルジャーノンの並外れた賢さを目の当たりにし、チャーリーはすぐに手術を受けることを希望した。

手術後、彼の知能はとてつもないスピードで向上していく。多くの人が子どものころから長い年月をかけて得ていく知識や経験をものの数か月で追い越し、ついには天才と称されるまでになる。さまざまな国の言語を習得したり、多数の研究に携わったりと彼の可能性は限界など知らないようであった。しかしそれゆえに、地位や名声に執着してしまう人間に嫌悪感を抱き始め、障がい者に対する世間からの扱いがひどいものであるということや、社会の汚さや虚しさに気付いてしまうようになる。

しかし一方では、アルジャーノンに奇行がみられるようになり、知能の向上が一時的なものであるとわかった。ここから物語の流れは大きく変わっていくのであった。

このタイトルについてだが、本を読み進めていっても意味が分からず、理解できないまま私はこの本を読み終えてしまうのだろうかと少々悔しさのようなものを感じつつあったのだが、最後の一文で私は衝撃を受けた。そして読み終わった今、さまざまなことを考えさせられることとなった。

この作品はすべてチャーリー視点であり、彼が体験したことや感じたこと、考えたことなどが具体的に書かれているため、感情移入というよりも、もはや自分の中のどこかにチャーリーがいるのではないかというような感覚さえ沸き起こってくる。この本を読んだことがない方には、この感覚はあまり理解していただけないかもしれない。しかし今、この図書委員は何を言っているのだろうかと思ったあなたにこそ読んで欲しいと心から思う。

新刊のご案内（その3）

【各学科の先生からの推薦図書②】

『演習で学ぶ MATLABによるディープラーニング』
 『英語で学ぶ 制御システム設計』
 『機械システム学のための数値計算法 MATLAB版』
 『実践ロボットの制御』
 『機械系教科書シリーズ CAD/CAM』
 『人工衛星・惑星探査機のための宇宙工学』
 『磁性複合材料 圧粉磁心とボンド磁石』
 『省エネモータの原理と設計法』
 『磁気工学の基礎Ⅰ』

吉富康成ほか著
 余錦華ほか著
 平井慎一ほか著
 平田光男ほか著
 望月達也ほか著
 竹ヶ原春貴ほか著
 田島伸著
 森本茂雄ほか著
 太田恵造著

「儚い羊たちの祝宴」

米澤穂信著

物質化学工学科1年 戸井 詰 桃佳

突然だが、浮世離れした世界で生きるお嬢様たちを思い浮かべてみて欲しい。彼女たちはとある大学の読書会サークル、「バベルの会」に所属している。それは、教養と品格を兼ね備えた彼女たちが集まって本を読み、意見を交換する会、らしい…

「儚い羊たちの祝宴」は、直木賞受賞の「黒牢城」や、最近アニメが放送された「小市民シリーズ」、京都アニメーションの「氷菓」で知っている人も多いであろう、米澤穂信の暗黒ミステリー短編小説だ。「小市民シリーズ」や「氷菓」を見た、または読んだことがある人なら分かると思うが、米澤穂信は青春ミステリー・日常ミステリーにおいて「日常の小さな謎」を取り扱っているのが特徴だ。しかし、「儚い羊たちの祝宴」は、全5つの邪悪な事件が収録されているイヤミス（読後、嫌な気持ちになるミステリーのこと）となっており、それぞれが独立したストーリーを展開していく作品となっている。恐るべきはそのラストの一行だ。ある程度展開が分かってきたところで、予想だにできなかった衝撃の事実が、最後の最後の一瞬で我々の背筋を凍らせてくる。断言しよう、それはもう癖になるほどの一撃で、今まで感じたことのない恐怖が、衝撃が、あなたを震撼させるだろう。特に「玉野五十鈴の誉れ」は最高だ。お嬢様が料理下手な従者に教えた「ある何気ない言葉」が、最後のたった一行で恐ろしいものへと変化し、頭から離れなくなってしまう。純粋な悪意に満ちた、残酷で残虐な毒々しい事件の数々、しかしその余韻が不思議と心地よく、読む手を止められない。

浮世離れした世界の彼女たちの考えは、到底小市民の我々に理解できるものではない。ましてや、彼女たちに共感できる人は少ないだろう。しかし、理解できなくて気持ち悪いのに、何故か読んでしまうのがこの作品だ。最後の衝撃を堪能するのもいいし、その後の余韻に浸るのもまたいい。更にわかる人にしか分からない伏線が張ってあるのも、この作品の魅力の一つだろう。とにかく、『味わえ、絶対零度の恐怖を。』

新刊のご案内（その4）

【各学科の先生からの推薦図書③】

『地図とデータで見るグローバリゼーションの世界ハンドブック』
『もういちど読む山川世界史PLUS アジア編』
『もういちど読む山川世界史PLUS ヨーロッパ・アメリカ編』
『世界を変えた科学史 2600年のサイエンスヒストリア』
『科学・技術の歴史が一冊でまるごとわかる』

ロラン・カルル工著
木村靖二ほか著
木村靖二著
三澤信也著
白鳥敬著

編集後記

図書館だより第82号に執筆いただいた皆様ご寄稿ありがとうございます。今年度は図書館もコロナ以前の利用状態に戻り、ひと安心していただけて、この冬はインフルエンザの大流行で心が休まらないですね。でも、図書館は静かに読書や学習を行えますし、消毒用アルコールの設置、常時換気、毎週清掃、返却本を全て洗浄水で拭くなどの措置を施していますので、今後も安心して図書館をご利用いただければと思っています。



奈良高専

National Institute of Technology (NICTE) Nara College

奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <https://www.nara-k.ac.jp/ninct-library/>



奈良高専図書館